

消費者市民社会の担い手としての自覚を持ち、 自ら選択・行動できる生徒の育成

～粘り強く学習に取り組む中で、自己調整力を培うための授業実践の工夫～

埼玉県中学校技術・家庭科研究会（第7分科会）

坂戸市立千代田中学校 教諭 高橋 亜沙美
所沢市立東中学校 教諭 吉永 美音里

1 はじめに

現在、貧困や感染症、気候変動、戦争など数多くの問題が世界中で解決急務とされており、地球上で安定して暮らし続けるため、国連サミットでは課題解決に向けた17の目標として2015年に「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)」を掲げた。その後改定された中学校学習指導要領技術・家庭科の家庭分野の目標において柱となった「生活の営みに係る見方・考え方」でも、さまざまな生活事象を持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫することと示されている。生徒はさまざまなメディアにおいて「持続可能な社会」「SDGs」などの言葉を目にし、「環境にやさしい暮らし」を送っていかねばならないと認識し、行動している。実際にそれらを意識した行動はどんなことが思い浮かぶかと生徒に質問すると、プラスチックごみ削減のためにレジ袋を断ってエコバッグを使用している、ごみの分別を意識している等と答える生徒が多い。しかし、実際には自然環境だけでなく、生産者の労働環境や賃金、エネルギー問題等のさまざまな視点・立場から多角的に課題を捉えることが必要である。また、インターネットやSNSの普及により、個人でも手軽に意見が発信できるようになった情報社会において、飽和する情報の中から正誤性を見極め、取舍選択していくといったスキルを身につけることも重要である。そのうえで、消費者市民として現在および将来の世代にわたって自身の消費行動が社会経済情勢や地球環境に影響を及ぼし得ることを自覚することが公正で持続可能な社会の形成につながると考える。

そこで、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、思考力・判断力・表現力を高め、消費者市民社会の担い手としての自覚を持ち、自ら選択・行動できる生徒の育成を目指し、研究主題を設定した。

2 研究のねらい

(1) 生徒の実態

令和5年12月、県内生徒約1291人を対象に実態調査を行った。「家庭分野の授業で学んだことを生活に活かそうとしている。」という態度に関わる質問に対し、80%以上の生徒が「あてはまる」と回答している。しかし、「普段から生活を便利にするために工夫したり、考えたりするほうだ。」という質問に対し「あてはまる」と答えた生徒は55%程度に留まっており、学習内容を今後の生活に活かそうという意識はあるものの、実際にどうしたらより便利にできるか具体的に考える思考力には結びついていない生徒も多いことがわかる。また、「家庭の学習で分からないことがあったときに、どのように解決するか。」という質問に対する回答では、友達に聞く、教科書やプリントで調べるといった解決法に続き、タブレットやスマートフォンで調べると答えた生徒は半数以上であった。このことから、生徒にとってインターネットを用いて分からないことを調べたり情報収集を行うことは日常生活の中で当たり前に行われている手段であることがわかる。さらに生徒の多くは、普段の生活の中で、ほしいものをお小遣いの範囲でやりくりするために値段や賞味・消費期限、自分が本当に欲しいかどうか考えたり、お小遣い帳等に記録をつけたり工夫していると生徒が多かったものの、商品の産地や労働問題、環境までに思考を巡らせ買うものを決めている生徒は少ない。「3R」の言葉の意味は知っており、環境のためにごみの分別の徹底や電気のこまめな消灯を心がける等身近な部分での工夫は出来ているものの、「自分の行動を地域や社会と結び付け、目を向けようとするまで至っていない」生徒が多く見受けられる。

活と環境』の授業で、生徒の粘り強さを高めるための工夫、自己調整力を高めるための工夫は何か」という質問に対し、「題材として身近なものを取り扱い、課題を立てさせ自分ごととして捉えられるよう設定する」「グループ活動による多様な考えの共有」「食生活・衣生活の単元とリンクさせて、自身の意思決定場面を設定する」「生徒自身に考えさせる活動を繰り返し積み重ねていく」というような意見がみられた。このことから、3年間を通してA、Bの内容を履修した際に関連付けた授業を繰り返し行うことで、定着を図ることをねらいとした年間指導計画を作成した。衣食住それぞれの内容の学習と組み合わせて行うことで、より多くの立場や視点から考え、課題をもって、持続可能な社会の構築に向けて考え、工夫する活動を通して、消費生活・環境に関する知識及び技能を身に付け、身近な消費生活と環境についての課題を解決する力、工夫し創造しようとする実践的な態度を育てると考えた。

また、指導に際してはICTを授業内に積極的に取り入れることで、選択に必要な情報の収集・整理や信頼性について話し合ったり、情報を取捨選択したりするための技能を育てることをねらいとしている。

『消費生活と環境』の授業で困っていること、難しいと感じることはあるか」という質問に対して「生徒がもっと身近に感じる題材や最新のニュースなどについて学ばなければならぬが教材研究の時間が不足している」「最新の金融状況、子どもを取り巻く実態の情報が不足しがちで、短い時間数のなかで伝えようとする説明が多くなってしまふ」といった課題が明らかになった。調査の結果、3年間のうち「消費生活・環境」に割り振られている時間数は平均で約8.5時間となっている。短い時間数の中で生徒の興味関心を引き出しつつ、効率的に指導を行うために、「持続可能な社会を目指して」の内容をもとに、今の自分の生活の課題を見つけ、長期休業中に実践し、レポートを仕上げてくる課題を出したり、話し合いやグループ活動といった生徒主体の授業で学びを深めたり、総合の時間を活用し、企業等による出張授業といった外部機関との連携を図るなどする。さらに、消費者教育は社会の授業内容と絡め、3年生後半で実施することで教科横断的な指導が可能になる。

(2) 授業実践 (情報を活用した上手な購入「どんな視点でさつまいもを選んだらよいだろうか」第3学年実施)

①学習内容

この授業では、中学生にとって身近な商品を取り上げ、情報の収集・整理や信頼性について話し合う活動を通して自立した消費者として消費行動について問題を見出して課題を解決する力が身につくであろうと考え授業実践を行った。

まず、値段や見た目が異なる3種類のさつまいもを題材にし、それぞれの値段のみを伝えて自分ならどれを選ぶか生徒に考えさせる。その際、購入場所や産地、味の特徴など、値段以外に知りたい情報を上げさせ、得られた情報からのさつまいもを選ぶかを考えさせ、その際の視点をワークシートに記入する。その後、Google Jamboardの付箋機能を使い、4人班で意見交換をし、交流後新たに得られた観点も踏まえ、再度自分ならどれを購入するか考えさせる。Jamboardを用いることで意見を出しやすく、かつ他の班が入力した内容もタブレットで確認できることで、より多くの視点に触れ考えを深められるようにした。ワークシートと共に振り返りシートも記入させ、意見交流を通して得られた新たな視点も踏まえ、考えを深めているかを記述で確認し、主体的に学習に取り組む態度を評価した。

②授業実践の成果

値段や本数だけを提示した後に、生徒が何かを購入するときに大切にしたいポイントを考え、その情報を得た上でそれぞれのさつまいもがどんな消費者に向いているのか、また自分自身の生活スタイルではどれを選ぶべきかを考える授業となった。ICTの活用やグループでの意見共有を通して学びの自己調整の場を提供し、粘り強く学習に取り組む場の提供を行うことができたが、生徒に提供される情報によって生徒の思考が大きく左右されてしまうため、売っている場所や糖度や産地、農薬の有無など与える情報については精査する必要がある。川越市の特産品であるさつまいもという生徒にとって身近な食材を扱ったことにより、グループでの取り組みだけでなく、個人での作業もスムーズに行うことが出来た。発表の時間は設けず、各グループが作成したJamboardを閲覧する時間を設けたことにより、適切な解決方法を考える手だてが広がったと考える。



図3 生徒の話し合い活動の様子

A	1個200円	B	1個100円	C	1個約230円
忙しい人	めんどくさがり屋	心が狭い人	近くに販売所がある人	コスパ気にする人	金がないやつ
主婦	ヤオコーが近い人	泥が嫌な人	泥を気にしない人	質より量	川越の人
	ヤオコーのポイントを使いたい・貯めたい人	お腹減って人	たくさん食べる人	人と話さずに買い物したい人	無農薬にこだわる人
6班		心が広い人		たくさんあっても買らせちゃう人	
				品質を気にする人	あまり量を食べない人
				甘いものが食べたい人	甘いのが好きな人
				泥が嫌な人	スイーツを作りたい人
				丸瓜が好きな人	

図4 付箋ツールを使った意見の交換

③生徒の感想

生徒の感想から、値段や本数などお得さも大切であるが、産地や糖度、売っている場所の利便性や地産地消を意識した記入が見ることができる。初めに選んだ商品と変わった生徒もあり、安さだけでなく、自分や家族のライフスタイル、使用する量や頻度から最適な商品の選択につなげることができた。

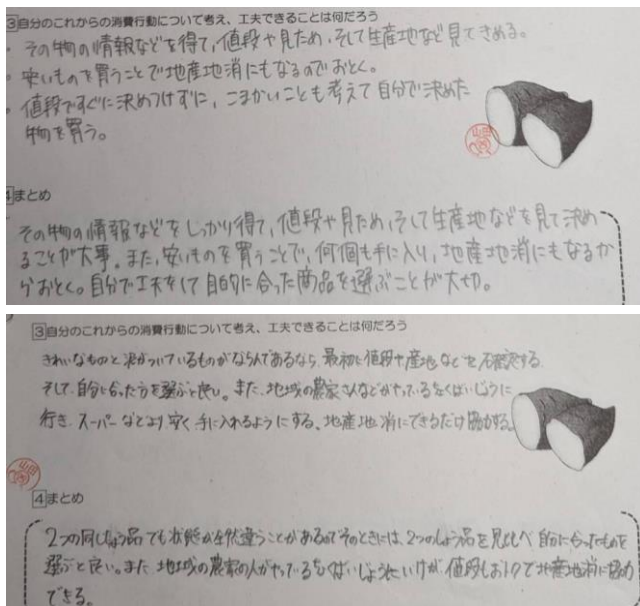


図5 ワークシートより生徒の記述

4 成果と課題

(1) 研究の成果

今回の研究で3年間を見通した年間学習指導計画を作成したことにより、社会との授業内容の関係や時間数との兼ね合いで第3学年での学習に偏りがちであった「消費生活・環境」の内容を「家族・家庭生活」「衣食住の生活」の内容とも関連させ、3年間を通して継続的に授業に組み込むことができた。家族や衣食住といった生徒の生活と関りが深い内容と「持続可能な社会を目指して」の内容

を合わせた授業を繰り返し実施することで、自分の立場だけでなくさまざまな視点から物事を捉え、自身の行動調整させることができる自己調整力とすぐには答えを出さず、考えつづけることができる粘り強さを備えさせたい。

また、消費生活と環境で取り扱う内容は社会情勢とも密接に関わっており、最新の情報収集や教材研究が欠かせないものだからこそ、生徒が自分事として捉えられるような題材設定が重要であると改めて認識した。生徒の生活に深く関わりのある題材を設定することで、自ら考え主体的に活動する問題解決能力を育成できると考える。

(2) 今後の課題

今回の授業実践は川越市で実施したため、地域の特産品として生徒にも身近なさつまいもの選び方を題材としたが、生徒や学校の実態によって左右されにくい、中学生にとって身近な題材を提案したい。また、金融など専門的な知識や最新の社会情勢を踏まえた授業を行っていくために企業や外部指導者の導入を活性化させたいが、教員に対する実態調査の結果より、「どこに依頼して良いかわからない」「打合せの時間がとれない」といった理由から、約9割が実施できていない現状がある。

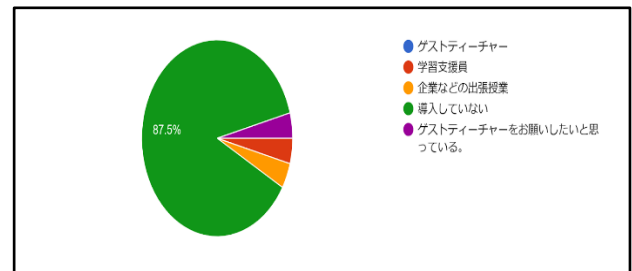


図6 「消費生活と環境」の授業で、「次のような外部指導を導入していますか。」

生徒が既習事項や自分の生活と関連付けて考え、適切な解決方法を選び、実践に向けて具体的に取り組んでいきやすい授業とするためにも、外部指導者の導入を進めていけるような手だてを考えたい。また、問題解決的な学習のために、ICTの活用に重点を置いた研究を進めていきたい。生徒の生活にとってインターネットやSNSはなくてはならないものになっており、授業の中でも積極的に活用していくことで、より自分の生活経験やライフスタイルに近づけて実生活に寄せた学習としていきたい。コンピュータなどの情報手段を活用して調べたり、発表したりなどより効果的なICTの活用をするための教材研究を進めたい。